



ルミエール

マルキ明子

目次

| | |
|--------------------|-----|
| ルネッサンスと瓦礫に咲く花のようによ | 7 |
| リデンプション | 51 |
| りいんかねーしょん | 161 |
| Révélations | 227 |

ルミエール

Lumière

ルネッサンスく瓦礫に咲く花のようなく

「お化け屋敷の係員さんと井戸の中から出てきたお化け、上目遣いがそっくりだったと思わない？」

私の表情に受けたケンにはむせ返り、アイスティーを吹き出した。天を仰いで笑う唇は最大限に伸び広がり、奔放に開いた口の中には純白の歯が隙間なく並んでいた。節の目立たない長い指が黒絹糸の髪を二度三度、ゆっくりと搔き上げた。

無防備な笑いの中にさえ見出せる数々のきらめきを永遠に忘れたくない……。夢中で登録済ファイルと一つ一つ照合し、最新情報に置き換え、記憶の引き出しに仕舞い込んだ。一連の作業は、この所、私の内部で密やかに、だが頻繁に行われていた。

ああ、どうして今まで見逃していたのだろう。ほんのり日に焼けた長い首の中央でアダムの林檎が大きくうねっている……。その忙せわしい活動は、夢の中で心安らかに泳ぐ私を無謀に揺り起こした、今朝の或る行為を思い起こさせた。

こうして特上の小箱に個別に保管された宝石は、思いがけなく転がり出では、生涯を通しひどく私を困らせることだろう……。そんな予感が心臓に軽く爪を立てた。

「この男こそ至上の美と知の融合によって生み落とされた希有の存在である」
そう信じて疑わない自分がいた。

漫画の中に登場する美男美女の背景にしばしば花を添えているが、通俗的な手法とあざ笑うことはできない。心の筆を振り、彼を描こうと試みた前歴を持つ身としては。尤も、私に絵の才能は皆無のようだ。デッサンに鮮やかな色を加えようとして、背後に花園を描こうものなら、途端にバランスを崩し、失敗に終わった。この男自体が既に完璧で何色にも染まろうとせず、一切の装飾を必要としなかったからである。

愛の逆は憎悪ではなく無関心だと何かで読んだ覚えがあるが、彼に向けられる感情は「親愛」または「憎悪」、そのどちらでもない場合は「偏見」だった。

透き通るような薄茶色の瞳は、悠然と、しかも当然の如く人々を見下ろし、刹那の支配者として君臨した。憧れと羨望と嫉妬が入り混じった卑屈な視線は、彼がその場を立ち去るまで群れて飛び交った。

彼を見詰めるうちに同化した私は、共に周囲の反応を堪能した。色鮮やかなオブライトで包まれた精神安定剤は一時的に壮大な効果をもたらし、偽りの自信をもたらしてくれた。

*

*

*

「ハーフ」という言葉が、「ガイジン」同様、頻繁に耳に入るのであるようと教えられた夜、旅立ちを明朝に控えて興奮気味だった私の心身は一気に冷え固まった。

母は無表情に説明を終えると、細かく肩を震わせ、下を向いた。テーブルを囲んでいた全員が黙り込んだ。頬を転がり顎を伝った水滴は、テーブルクロスの上には落下した。ビニール素材に弾かれた粒は丸まり、或いは形を崩した。涙の最期を看取ることで、私は辛うじて息を整えていた。

父が静かに立ち上がった。妹は父の気持ちを汲み取り、席を譲った。

「その言葉はもう日本語として定着しているんだろう？ 聞こえても気にしなければ良いだけだ。まったく、お前はいつも余計なことを言うんだから……」

父は母の傍に椅子を寄せ、肩を抱いて軽く揺すった。

二十年に及ぶ異国暮らしは母にとって決して平坦な道程ではなかった。様々な苦悩を多少なりとも知る私には、娘を思う余り取り乱す彼女の心情が分からなくもなかった。

「心配しないで、私は大丈夫。パパの言う通りよ」

できるだけ優しく慰めたつもりだったが、母は泣きじゃくるばかりだった。日本留学を勧めた人は誰であろう、母本人であつたというのに……。

*

*

*

「寂れゆく遊園地に勤めていると、物悲しい気分が顔に出てしまうのかな。やたら賑やかな音楽があちこちで鳴り響いているのに、客の声がほとんど聞こえなくて不自然だと思わない？ 何だか異次元空間に迷い込んでしまったみたいだね」

ケンの唇から苦もなく流れ出る言葉は、常に的を射ていた。不景気な話とは正反對の、華やかな笑顔が向けられた。独り占めできるはずの美を受け止め切れず、私は僅かに緊張した。彼のレトリックにふさわしい答えを探していると、長い睫に縁取りされた大きな瞳に取り込まれそうになり、気が急いだ。

「そうね。さっきのジェットコースターだって、私達の他に誰も乗っていないなかったものね。思いっきり叫びたいのに、ええっと……何とか……遠慮しないといけないような気がして……」

答えを上手くまとめようとするほど妙な言葉遣いではないかと気になり、言い淀んでしまった。

まだ細かい感情表現に難がある私に比べ、ケンの日本語は日本人と同レベルの会話と読み書きが可能だという流暢さ以上に、機知に富んでいた。いつでも何処でも冷静でいられるという彼の度胸は、あらゆる分野に精通し秀でているという自信に基づいていた。

*

*

*

ケンが同じ学部の学生に絡まれている場面に出くわしたことがある。その男の意見の揚げ足を取ってからかかってしまったらしい。軽く受け流せなかった相手は声を荒げ、御返しにとばかりケンの自尊心を傷つけるような言葉で盛んに煽っていた。私はおろおろするばかりだったが、ケンは決して相手の挑発に乗らなかつた。穏や

かな表情に時として笑みさえ浮かべ、声のトーンを一定に保って理路整然とした受け答えに終始していた。

結局、男は単細胞振りを披露しただけに終わり、背中を丸めて去っていった。後に彼は潔く友人に告白したらしい。

「あいつの言いぐさ聞いとつたらめっちゃむかついてなあ。下手に手エ出したら反対に痛い目にあうって分かつたし口で勝負に出たんやけど、空回りしてあかんかったわ。あいつの日本語は、ほんま、大したもんやで。あいつに勝つには頭も鍛え直さんとあかんわ」

その噂を聞き、私は初めて、ケンが空手何段という武道の達人であると知った。

大阪出身の母を持つ私にとって関西弁は耳に優しく、自分では話せなくても聞き取りは容易ですらあった。むしろ、私が教科書を通して習った「スタンダード・ジヤパニーズ」とは程遠い、流行り言葉を交えた若者独特の言い回しには、翻弄され気味だった。

立ち読みページはここでおわりです。

お立ち寄りありがとうございました。

またのご利用をお待ちしております。



新風舎
立ち読み横丁